

大鏡卷二

W 5618

片
稽
登錄

大鏡卷之三

目錄

小	廉	清	真	批
條	義	慎	信	把
在				左
大				大
臣				臣

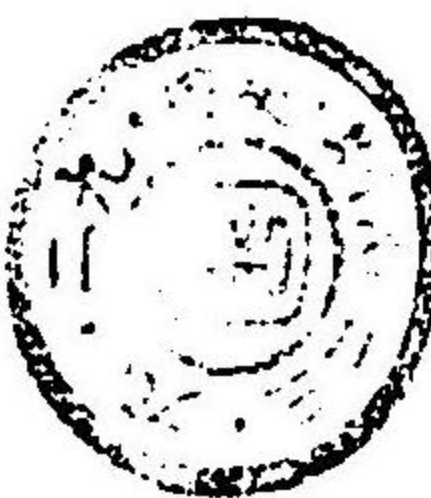
小
條
在
大
臣
師
手

賴
忠

實
賴

忠
平
基
經
四
郎

仲
平
基
經
二
郎



大鏡卷之三

目一

一左大臣仲平

このたごひ基經モトツネのたごひの二郎、母と本院時平の大平

本朝本朝の位よへ十二年ぞおはせし、枇杷ビのた大

はももし母路をび伊勢が集り

たすもあしりほふいて人にむかへしなり

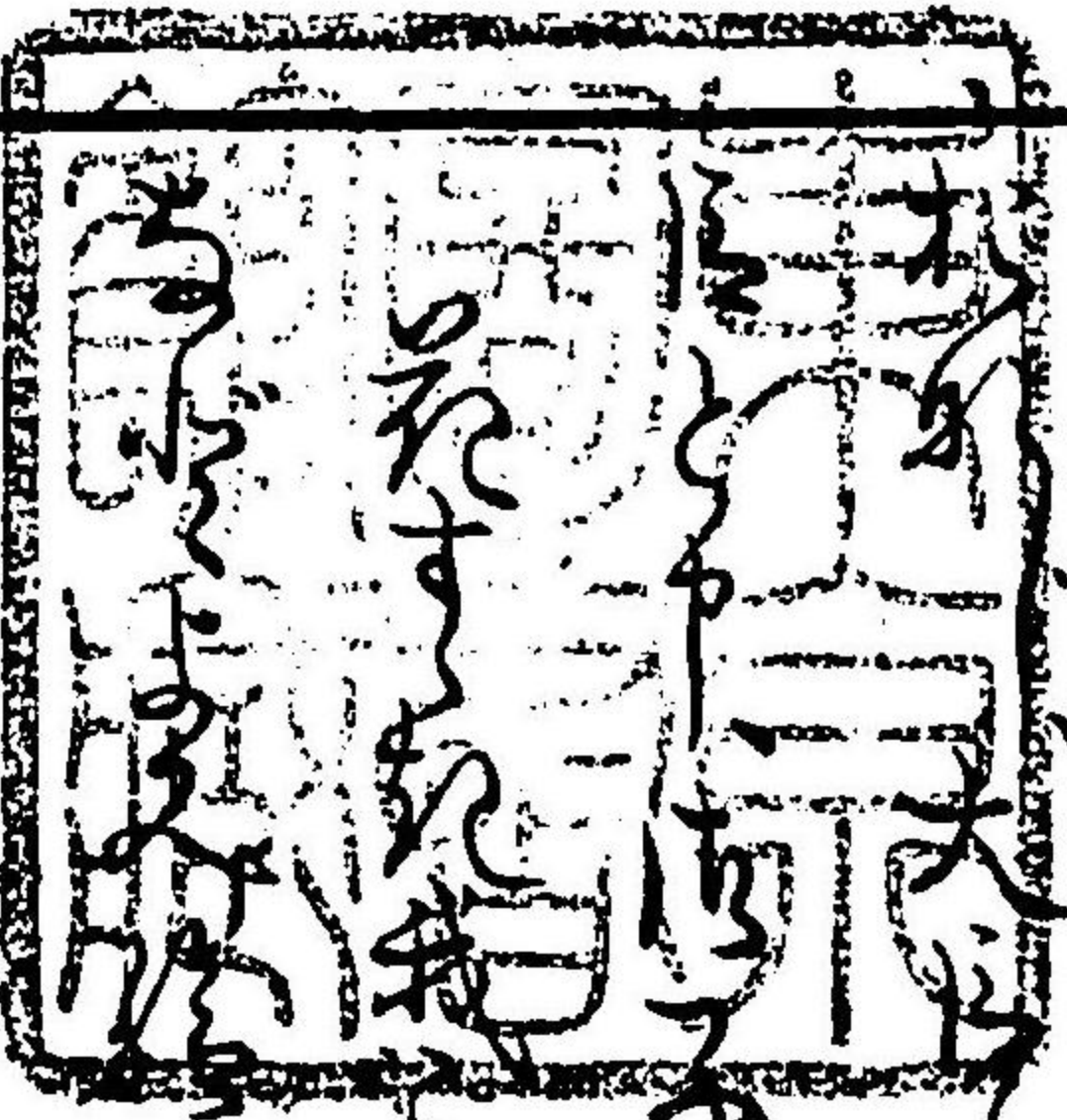
くもしけ人よおそひ身信忠平がゆりの道えたる

まじりし十年まじり大平にたかりし路のまじりし

にちのたまはくまじり大平にたかりし路のまじりし

たすもあしりほふいて人にむかへしなり

くもしけ人よおそひ身信忠平がゆりの道えたる



心なきにけり。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。一 日本
第一の縁なきにけり。一 縁なきにけり。一 羅漢寺に
て。縁なきにけり。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。
の縁なきにけり。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。
縁なきにけり。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。
せ。一 故中^{道隆}關白殿東三條にて。縁なきにけり。縁なきに
けり。縁なきにけり。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。
ま。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。
ふ。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。
關白殿にて。縁なきにけり。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。

人。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。
奉りて。縁なきにけり。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。
り。縁なきにけり。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。
ま。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。
を。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。
を。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。
を。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。
を。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。
を。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。
を。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。
を。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。一 縁なきにけり。

やうなる事ハせしめ給ひぬ殿をこそ
くありけりこそ大貳の位むかへに
右清門督のきしんむのよてなせし
り大貳の位もころる法住寺のお為光のお方
るおをひふははの女君も花山院の清時乃
弘徽殿の女御又入道中納言のお方又き
を今の中宮大夫齊信御とがやめぬ宮の
ごふの二郎敦敏少将のおちどはの君右清門督
までなり給ひし齊敏の君とがやめぬ

の位をこそ君幡磨守平丈のむかへは
るおはせし太郎高遠の君大貳の位
にき二郎懐平とて中納言右清門督
まは侍從宰相資平の君いもの皇太后宮の權大夫
ておをひふははの君おをひふははの君
ごふの君いもの皇太后宮の權大夫
つけたまはし給ひし
るおをひふははの君おをひふははの君
ごふの君いもの皇太后宮の權大夫
ておをひふははの君おをひふははの君

とぞしてしつづける其意は今のまじき宮の右大臣
とやしてしつづける其意は今のまじき宮の右大臣
は子のなまじきとせしめしつづける其意は今のまじき
の宰相をやらしめしつづける其意は今のまじき
人をなまじきとせしめしつづける其意は今のまじき
は隙にて内供高圓の意をたたりて又ちつづける
る女房をせしめしつづける其意は今のまじき
うまじきとせしめしつづける其意は今のまじき
の母と頼定の宰相のめしつづける其意は今のまじき
為平の式部卿の親王のほむくめしつづける其意は今のまじき

うせしめしつづける其意は今のまじき
別とて女君千日の講をこころしつづける其意は今のまじき
のうへつづける其意は今のまじき
うせしめしつづける其意は今のまじき
族とやしめしつづける其意は今のまじき
ちしめしつづける其意は今のまじき
この女君を山野の宮にせん後の南面より帳ゆたて
いふにせしめしつづける其意は今のまじき
人うせしめしつづける其意は今のまじき
たゆりせしめしつづける其意は今のまじき

のゝつゝの庄園とてゝ後々ももつゝ
後々ももつゝの事もなつゝ
殿渡^{デン}後々ももつゝの事もなつゝ
の法堂ももつゝの事もなつゝ
湯屋ももつゝの事もなつゝ
金^{キン}ももつゝの事もなつゝ
器ももつゝの事もなつゝ
時ももつゝの事もなつゝ

の法服をたまもつゝ
法師ももつゝの事もなつゝ
住僧ももつゝの事もなつゝ
持經者ももつゝの事もなつゝ
眞言師ももつゝの事もなつゝ
法師ももつゝの事もなつゝ
法師ももつゝの事もなつゝ
法師ももつゝの事もなつゝ
法師ももつゝの事もなつゝ
法師ももつゝの事もなつゝ
法師ももつゝの事もなつゝ
法師ももつゝの事もなつゝ
法師ももつゝの事もなつゝ

あまのつらさなりてあまの事なり

一条院位に上らせ給ひよきまはさ人にて開白のつ
せしめよきよめたるかたはかたに殿に上りて西条の宮
よりおのりてよきまはさ給ひよきまはさ給ひよきまはさ
の御殿と時の一の人の孫よてえともおのりておのりて
給ひよきまはさ給ひよきまはさ給ひよきまはさ
西洞院のがりにあつておのりておのりておのりて
よきまはさ給ひよきまはさ給ひよきまはさ給ひよきまはさ
大宮のたよきまはさ給ひよきまはさ給ひよきまはさ
おのりておのりておのりておのりておのりておのりて

せしめよきよめたるかたはかたに殿に上りて西条の宮
よりおのりてよきまはさ給ひよきまはさ給ひよきまはさ
の御殿と時の一の人の孫よてえともおのりておのりて
給ひよきまはさ給ひよきまはさ給ひよきまはさ
西洞院のがりにあつておのりておのりておのりて
よきまはさ給ひよきまはさ給ひよきまはさ給ひよきまはさ
大宮のたよきまはさ給ひよきまはさ給ひよきまはさ
おのりておのりておのりておのりておのりておのりて
さしめよきよめたるかたはかたに殿に上りて西条の宮
よりおのりてよきまはさ給ひよきまはさ給ひよきまはさ
の御殿と時の一の人の孫よてえともおのりておのりて
給ひよきまはさ給ひよきまはさ給ひよきまはさ
西洞院のがりにあつておのりておのりておのりて
よきまはさ給ひよきまはさ給ひよきまはさ給ひよきまはさ
大宮のたよきまはさ給ひよきまはさ給ひよきまはさ
おのりておのりておのりておのりておのりておのりて
のしめよきよめたるかたはかたに殿に上りて西条の宮
よりおのりてよきまはさ給ひよきまはさ給ひよきまはさ
の御殿と時の一の人の孫よてえともおのりておのりて
給ひよきまはさ給ひよきまはさ給ひよきまはさ
西洞院のがりにあつておのりておのりておのりて
よきまはさ給ひよきまはさ給ひよきまはさ給ひよきまはさ
大宮のたよきまはさ給ひよきまはさ給ひよきまはさ
おのりておのりておのりておのりておのりておのりて

のりしる人よりいすまわりのしすまじつのだぶころを
ひきかきしるしるしる頼忠のなまじつへの入らるるは
ましるしるしる直衣にて肉しるまわりのひきかきしる
ざりき奏せさせ給ひしるしるしるしるしるしるしるしる
まわりのたましるしるしるしるしるしるしるしるしるしる
申行事のしるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしる
ごしるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしる
又あしるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしる
しるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしる
そんあしるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしる

きしるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしる
一人はしるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしる
女はしるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしる
宮とやした皇子おはせ給ひしるしるしるしるしるしるしる
いみじたる有心者有識しるしるしるしるしるしるしるしる
はいのりしるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしる
季のしるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしる
び四日がはしるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしる
しるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしる
如法しるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしるしる

頭陀行せしむる僧都も、京中へてらみどりて
 齋ナニをせしむる僧都も、京中へてらみどりて
 ねの儀コキ器キをせしむる僧都も、京中へてらみどりて
 ぶしとて僧都もを食せしめ給ひて
 上手にせしむる僧都も、京中へてらみどりて

[別] 今の入道道長をせしむる僧都も、京中へてらみどりて
 上手にせしむる僧都も、京中へてらみどりて

んとせしむる僧都も、京中へてらみどりて
 ねの儀コキ器キをせしむる僧都も、京中へてらみどりて
 ぶしとて僧都もを食せしめ給ひて
 上手にせしむる僧都も、京中へてらみどりて
 入道道長をせしむる僧都も、京中へてらみどりて
 言まへ宰相よとぞればせしむる僧都も、京中へてらみどりて
 せしむる僧都も、京中へてらみどりて
 まへり一度入道道長をせしむる僧都も、京中へてらみどりて
 ニもぐり射さづり給ひつ二度入道道長をせしむる僧都も、京中へてらみどりて
 んぬ大納言をせしむる僧都も、京中へてらみどりて

初の矢あしつぬ大納言のちいらの矢あしつぬ入
道殿夫らび射しむ心ちかへたほりきつたて矢い
心へしむしちらむ心ちかへたほりきつたて矢い
心へしむしちらむ心ちかへたほりきつたて矢い
心へしむしちらむ心ちかへたほりきつたて矢い
心へしむしちらむ心ちかへたほりきつたて矢い
心へしむしちらむ心ちかへたほりきつたて矢い
心へしむしちらむ心ちかへたほりきつたて矢い
心へしむしちらむ心ちかへたほりきつたて矢い
心へしむしちらむ心ちかへたほりきつたて矢い
心へしむしちらむ心ちかへたほりきつたて矢い

心へしむしちらむ心ちかへたほりきつたて矢い
心へしむしちらむ心ちかへたほりきつたて矢い
心へしむしちらむ心ちかへたほりきつたて矢い
心へしむしちらむ心ちかへたほりきつたて矢い
心へしむしちらむ心ちかへたほりきつたて矢い
心へしむしちらむ心ちかへたほりきつたて矢い
心へしむしちらむ心ちかへたほりきつたて矢い
心へしむしちらむ心ちかへたほりきつたて矢い
心へしむしちらむ心ちかへたほりきつたて矢い
心へしむしちらむ心ちかへたほりきつたて矢い

今一とらるのし課子子とあるは院の時女流めて四條
の宮より尾少をなほしまひえりのやうそ後女流のい
つそしの男君只今按察大納言の公任卿とやはの野
の宮の流りすまごなままびふやの道すぐらあまり
よたさづづの心ゆめたらがえなまりその流はむす
めも今の内大の北方にて年ごら多く公違う
こつけ路入まつのちづみ月ごらせ給ひて大納言
よらづきまづびらがらなげく事のたりのしえを
とこ君一人がなまりる左大辨定頼の君いらると人
の中にはありのふれぎめよ手にてたまひめりの毎北方

いやあでにははらいの村上の流九宮の流むひめ武峯入道少將高光ままらなるの流むひめとら内大
后殿のうへをけ辨の君いらるははらいのいといと
やむごらめらいの大納言及無心の事つたらづのいま
いらやはいもらの四條の宮の后とらせ給ひて
はらめらいもらいる西洞院のほりにたり
まませむ東三條のままをわけらせ給ふら大入道及も兼家
故女院もむひいらるに按察大納言及公任
ら后の流せらいらるたらがさらなるままに
后馬をいのこらる女流をいの后とらめら給ふら

とらりんとまわりのあつちかへけるを殿をほめてたてまつ
りてそめはむらさきのきりぎりすはかたきりぎりすきりぎりす
たはよもたけむらさきのきりぎりすきりぎりすきりぎりす
あふりけとむらさきのきりぎりすきりぎりすきりぎりす
如_{詮子}法后_{スケ}にたてまつりて肉入_{スケ}にたてまつりて大納言
殿の亮_{スケ}にたてまつりて出_{スケ}車_{スケ}のあつちかへけるを
りかへてむらさきのきりぎりすきりぎりすきりぎりす
何事にもなつちかへけるをむらさきのきりぎりすきりぎりす
たをきりぎりすきりぎりすきりぎりすきりぎりすきりぎりす

とらりんとまわりのあつちかへけるを殿をほめてたてまつ
りてそめはむらさきのきりぎりすはかたきりぎりすきりぎりす
たはよもたけむらさきのきりぎりすきりぎりすきりぎりす
あふりけとむらさきのきりぎりすきりぎりすきりぎりす
如_{詮子}法后_{スケ}にたてまつりて肉入_{スケ}にたてまつりて大納言
殿の亮_{スケ}にたてまつりて出_{スケ}車_{スケ}のあつちかへけるを
りかへてむらさきのきりぎりすきりぎりすきりぎりす
何事にもなつちかへけるをむらさきのきりぎりすきりぎりす
たをきりぎりすきりぎりすきりぎりすきりぎりすきりぎりす

あしきちぎ〜こゝろを〜
入るがらば〜
時められたる〜
故宮のいふ〜
永平
八宮の男〜
の

の〜
の國を延喜天曆〜
の先帝は事、天曆〜
か〜
長徳元年四月二十三日〜
五十二、大將を〜
の

ニヤウモ
名聞

名聞にちむらうなほかきしとせらるゝ女待所
上の流琴きしとせらるゝ女待所
の流琴きしとせらるゝ女待所
の流琴きしとせらるゝ女待所
の流琴きしとせらるゝ女待所
の流琴きしとせらるゝ女待所
の流琴きしとせらるゝ女待所
の流琴きしとせらるゝ女待所
の流琴きしとせらるゝ女待所
の流琴きしとせらるゝ女待所

の流琴きしとせらるゝ女待所
の流琴きしとせらるゝ女待所
の流琴きしとせらるゝ女待所
の流琴きしとせらるゝ女待所
の流琴きしとせらるゝ女待所
の流琴きしとせらるゝ女待所
の流琴きしとせらるゝ女待所
の流琴きしとせらるゝ女待所
の流琴きしとせらるゝ女待所
の流琴きしとせらるゝ女待所

くや〜くおだく〜はら〜し〜青〜れ〜る〜ご〜は〜け
る〜ま〜いに親王ミコノミま〜も〜は〜の〜は〜い〜ち〜の〜た〜ま〜
人〜の〜ま〜も〜は〜の〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜
見〜の〜ま〜も〜は〜の〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜
ん〜の〜ま〜も〜は〜の〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜
路〜の〜ま〜も〜は〜の〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜
ほ〜え〜お〜は〜せ〜人〜の〜ま〜も〜は〜の〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜
〜の〜ま〜も〜は〜の〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜は〜
が〜お〜は〜せ〜の〜女君メグミ二道任為任人道任為任ぞ〜お〜は〜せ〜女君メグミの
三条院の東宮にておはせ〜ま〜の〜ま〜の〜女君メグミ〜

宣耀殿と申すは時〜おはせ〜ま〜の〜ま〜の〜親王ミコノミ四四所
女宮二人〜おはせ〜の〜ま〜の〜東宮位〜つ〜つ〜
ま〜して又の年長和元年四月廿八日右に〜
ひて皇后宮と申すは又今一所の女君メグミを〜
せ給ひ〜後後の〜心心わ〜る〜冷泉院の四の〜
と申すは入〜て二三年は〜の〜お〜は〜せ〜
宮、和泉式部におはせ〜の〜ま〜の〜
小一條院〜入〜らせ給ひ〜の〜後〜の〜ま〜の〜
えぬ〜の〜ま〜の〜お〜は〜せ〜
ま〜の〜ま〜の〜お〜は〜せ〜
皇后宮〜

大鏡卷之三
二十六
同日同月廿四日...
東宮...
武部卿...
茶院...
當...

同日同月廿四日...
東宮...
武部卿...
茶院...
當...
同日同月廿四日...
東宮...
武部卿...
茶院...
當...

Handwritten text in a cursive style, likely a form of Japanese calligraphy (sōsho). The text is arranged in approximately 12 horizontal lines across the page.

Handwritten text in a cursive style, likely a form of Japanese calligraphy (sōsho). The text is arranged in approximately 12 horizontal lines across the page. There are several annotations in smaller characters:

- At the top right of the text block: ヤシカサ
- At the top left of the text block: 教良
- At the bottom left of the text block: 道長 上東門院 殿

東宮 高松 皇子 皇后 皇子

東宮 高松 皇子 皇后 皇子

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, consisting of approximately 12 lines of text.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, consisting of approximately 12 lines of text. The text is written in a dense, flowing style.

臨してはつちをさしむるに――啓すはつちをさしむるに蔵人の
まはつちをさしむるに蔵人のまはつちをさしむるに蔵人の
今ハ之れをさしむるに蔵人のまはつちをさしむるに蔵人の
をさしむるに蔵人のまはつちをさしむるに蔵人の
東宮のまはつちをさしむるに蔵人の
光
をさしむるに蔵人のまはつちをさしむるに蔵人の
をさしむるに蔵人のまはつちをさしむるに蔵人の
をさしむるに蔵人のまはつちをさしむるに蔵人の
をさしむるに蔵人のまはつちをさしむるに蔵人の
をさしむるに蔵人のまはつちをさしむるに蔵人の

をさしむるに蔵人のまはつちをさしむるに蔵人の
をさしむるに蔵人のまはつちをさしむるに蔵人の
をさしむるに蔵人のまはつちをさしむるに蔵人の
をさしむるに蔵人のまはつちをさしむるに蔵人の
をさしむるに蔵人のまはつちをさしむるに蔵人の
をさしむるに蔵人のまはつちをさしむるに蔵人の
をさしむるに蔵人のまはつちをさしむるに蔵人の
をさしむるに蔵人のまはつちをさしむるに蔵人の
をさしむるに蔵人のまはつちをさしむるに蔵人の
をさしむるに蔵人のまはつちをさしむるに蔵人の

のまじりし事にして東宮の御成程に
御成程に御成程に御成程に御成程に
らちの御成程に御成程に御成程に
らちの御成程に御成程に御成程に
らちの御成程に御成程に御成程に
らちの御成程に御成程に御成程に
らちの御成程に御成程に御成程に
らちの御成程に御成程に御成程に
らちの御成程に御成程に御成程に
らちの御成程に御成程に御成程に

らちの御成程に御成程に御成程に
らちの御成程に御成程に御成程に
らちの御成程に御成程に御成程に
らちの御成程に御成程に御成程に
らちの御成程に御成程に御成程に
らちの御成程に御成程に御成程に
らちの御成程に御成程に御成程に
らちの御成程に御成程に御成程に
らちの御成程に御成程に御成程に
らちの御成程に御成程に御成程に

...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...

...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...
 ...事...

より出家して仁和寺僧正清信の位ありしが物よそなはし
 ましめて次第にのちのち女官に入心に
 りておつと二條院の位時の齋宮にしつせ給ひ
 一をのびてたまひのちは道雅の君には
 ありせ給ひふると二條院をはちかひのち
 ありはしは事なるにはありてありしに
是ハ大ニ
條大將の時は女官なるは是ハ大ニ
條大將の時は女官なるは是ハ大ニ
 二條院の位時に奉らんとおぼしむるは
 くらよりして大納言のむらありて後には例

くらよりして父の大納言小一條の大將を贈太政大
 将とありてその後ろにありては給ひてふとあり
 が皇太后宮いひめでたくなはしはまふりはせり
 と一人と侍後入道いひ相任つと大蔵卿通任の
 君とありては又伊豫の入道為任もそのか
 といひその女君とありはしはありてあり
 おはせしにいはははしは大將のしつせ給ひけ
 る處ツクブツ分の所領ありてありける人し
 まし給ひてありてありてありてあり
 のしとありてありてありてありてあり

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, arranged in two columns. The text is dense and fills most of the page area.

大鏡卷之三終

大鏡卷之三終

大鏡卷之四目錄

九條右大臣 師輔

大鏡卷之四

目一

一右大臣師輔

此のちゆきつと忠平のちゆきつと三郎若狭母右大臣源能有
のほむけあいをゆる九条殿うたははます公卿よて廿
六年大后の位にさく十四年ごたははます

別天徳四年五月二日出家せさせ給ひしめたは廿五年卒
三よき

はらうまふいよ東宮又西宮を思たきたるもし
あつれ給ひたりとてあつれ給ひたりとてあつれ給ひたりとて
あつれ給ひたりとてあつれ給ひたりとてあつれ給ひたりとて
あつれ給ひたりとてあつれ給ひたりとてあつれ給ひたりとて

天德二年十二月二十七日
別天德二年十二月二十七日
第一の位に
か
か
か

天德二年十二月二十七日
別天德二年十二月二十七日
第一の位に
か
か
か

天德二年十二月二十七日
別天德二年十二月二十七日
第一の位に
か
か
か

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, consisting of approximately 15 lines of text.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy, consisting of approximately 15 lines of text.

職事

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines across the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian calligraphy. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines across the page.

いづくに侍らむかしよかむ武部卿の宮ミヤにニ
あるにやむかしよかむ西宮殿の宮ミヤにニ
ついで源氏の宮ミヤにニ
非道ヒトチにニ
かかむかしよかむ
ついで源氏の宮ミヤにニ
ついで源氏の宮ミヤにニ
ついで源氏の宮ミヤにニ
ついで源氏の宮ミヤにニ
ついで源氏の宮ミヤにニ
ついで源氏の宮ミヤにニ
ついで源氏の宮ミヤにニ
ついで源氏の宮ミヤにニ
ついで源氏の宮ミヤにニ

はむかし北の陣マタにニ
ついで源氏の宮ミヤにニ
ついで源氏の宮ミヤにニ
ついで源氏の宮ミヤにニ
ついで源氏の宮ミヤにニ
ついで源氏の宮ミヤにニ
ついで源氏の宮ミヤにニ
ついで源氏の宮ミヤにニ
ついで源氏の宮ミヤにニ
ついで源氏の宮ミヤにニ
ついで源氏の宮ミヤにニ
ついで源氏の宮ミヤにニ
ついで源氏の宮ミヤにニ
ついで源氏の宮ミヤにニ
ついで源氏の宮ミヤにニ

是の如くは...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...
 ...

龍口はすくなくとも、
色は、
又、
今、
十餘年、

今、
齋院、
佛經、
念誦、

今ノ蘭白^{横通}駿兵衛佐トテ法
今ノ蘭白駿兵衛佐トテ法
今ノ蘭白駿兵衛佐トテ法
今ノ蘭白駿兵衛佐トテ法
今ノ蘭白駿兵衛佐トテ法
今ノ蘭白駿兵衛佐トテ法
今ノ蘭白駿兵衛佐トテ法
今ノ蘭白駿兵衛佐トテ法
今ノ蘭白駿兵衛佐トテ法
今ノ蘭白駿兵衛佐トテ法

襖ノ前掛ニテハ
襖ノ前掛ニテハ
襖ノ前掛ニテハ
襖ノ前掛ニテハ
襖ノ前掛ニテハ
襖ノ前掛ニテハ
襖ノ前掛ニテハ
襖ノ前掛ニテハ
襖ノ前掛ニテハ
襖ノ前掛ニテハ

むめい... 時... 貞観殿
の内侍のか... 申... せ... ねがえに
... 女... 九条殿の...
... 西宮殿の...
... 冷泉殿の東
... 女...

... 十一人
... 大政大臣...
... 右兵衛督忠君又北野の三位遠度又大藏卿
遠量、多武峯入道少将^{高光}君... 又法師... 飯室乃
権僧正^{慈忍}... 禅林寺の僧正^{深覺}... 佛の...
... 法師... 験者^{ガンザ}... 兼隆
北野の三位の... 尋空律師、朝源律師... 又大
藏卿の... 女子... 兼隆

の
事
事
門カの
の
ま
の
入道長道殿
ら

俊賢源民部卿

の
事
事
門カの
の
ま
の
入道長道殿
ら

大鏡卷之四終

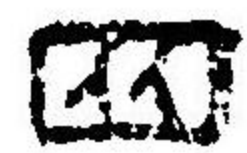
明治廿三年九月十日印刷
同年九月十五日出版

版權登錄

校訂者

發行兼
印刷者

版權所有卷



久米幹文

府下本郷區駒込
西片町十番地

吉川半

府下京橋區南傳馬町
一丁目十二番地



館書圖京東				
	136	2	10	
冊	號	架	函	類門